

第5回みどりの食料システム戦略に係る意見交換会 (生産者（水田作）)

日時：令和3年2月1日（月）13:30～15:00

場所：オンライン開催

参加者：別紙参照

【先方コメント概要】

- 本戦略の方向性や取組を進めていくことは非常に重要。
- 化学農薬の50%低減や、有機農業面積割合25%への拡大は、難しいものの可能であると考えているが、コストや価格が上昇するため、現状での挑戦は難しい。
- 一番大事なのは農業者の意識を変えること。有機や特裁を作ることが縛りとなり、農業者の足かせになったり、生産性を著しく悪化させるようなルール作りは絶対にしてはいけない。
- EUの数値水準でも達成可能と思うが、この数値がいきなり出てくると現場では否定的な反応が予想される。
- 化学農薬使用量を1/3、化学肥料使用量を現行の半分以下にしているが、収量・品質は低下せず、コストや労力の削減も可能。
- 農薬・肥料の削減は、思ったほど収量には影響がないと実感。こうした経験を周囲に伝えることで、将来に向けてよい方向に持っていけるのではないか。
- 化学肥料はコスト削減の観点から100%鶏ふんを使用している。化学農薬は適期散布することで、金額ベースで1/3に削減。
- 昔は、カニ殻等の未利用資源を使っていたが、今は肥料化にコストがかかっており、農家が使いづらくなっている。
- 水稻では化学肥料低減の目標を高くしても問題ない。農薬の5割削減も可能。

- 「有機農業」と聞くと、生産者はハードルが高く、この戦略が目指しているものと誤解を生じると感じるので、別の言葉で説明し、推進する方が取り組みやすいのではないか。
- 有機農業は、常に土壌の状態を見極めて最適な栽培を行うことで、予防的な農薬の使用に頼らず、作物の健全な育成を目指す。
- 水田での有機農業面積拡大の課題は除草。
- 雑草の状態まで見られるような技術開発に期待している。
- 有機農業の拡大は、20年で5%拡大が限界という印象。
- CO₂減少への寄与や農薬の環境への影響を消費者に見える化すべき。
- カメムシの被害粒対策に色彩選別機を導入。これにより、カメムシの防除を昨年から行わなくてもよくなった。
- メーカー主導の技術ではなく、農業者が本当に必要としている農業者目線の技術開発が必要。
- 地域に合った技術を指導できる者が地域の拠点にいることが重要。
- 海外で栽培された緑肥種子を輸入していることや国産の菜種油かすの入手が難しいことが懸念。生産現場だけでなく、資材調達といった取組も含めて考えなければならない。
- 収益性に不透明な点が多いと生産現場での取組は進まない。
- 得られるメリットよりも変えることの煩わしさを気にしているため、現状の作業をなくして、新しい技術を導入するようにしないと、目標の達成が難しくなる。
- 規制が大変厳しいことが問題。特区のようなものをもっと簡単に導入できるようにしていただけると進むと思う。

(以上)

(別紙)

第5回みどりの食料システム戦略に係る意見交換会
(生産者(水田作))
出席者一覧

白石農園
しらいし まなぶ
白石 学 代表

(有) 横田農場
よこた しゅういち
横田 修一 代表取締役

(農) 田原
なかむら ひろし
中村 博 組合長

(有) 小原営農センター
みやた かよこ
宮田 香代子 代表取締役

(農) 丹波たぶち農場
たぶち しんや
田渕 真也 理事